川袋の塚発掘調査報告書

1981

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は信濃川左岸北部地区県営ほ場整備事業に伴い新潟県長岡農地事務所と長岡市の費用負担契約に基づいて，長岡市教育委員会が実施した「川袋の塚」の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

このたびの調査対象となった「川袋の塚」の所在する信濃川左岸北部地区は信濃川の氾濫原と考えられる水田の単作地帯であり，人々の生活は古くから水との戦いの歴史であったと考えられます。

昭和初期には区画整理及び治水事業がなされてこの地区の様相は一変し，さらに現在生産性向上と農業所得の増大を図る目的で県営ほ場整備事業が行われることとなりました。

この調査によって発見された陶磁器や村の古老の話，「川西郷土誌」の記録を総合するとき，この地区の歴史を別の角度から知ることができ感慨深いものがあります。

最後に今回の調査に当たり計画から実施に至るまで格別の御配慮をいただいた新潟県長岡農地事務所及び新潟県教育委員会の方々を初め，御協力いただいた地元の方々に心からお礼申しあげます。

昭和56年3月

長岡市教育委員会
教育長　横田　博

例　　言

1. 本書は信濃川左岸北部地区県営ほ場整備事業に伴い実施した新潟県長岡市川袋町字君帰に所在する塚の発掘調査の記録である。
2. この塚は明治45年発刊の「川西郷土誌」によれば単に「塚」と表示されており，地元古老の間でも定まった名称がなかったため，確認にあたって所在町名をとり「川袋の塚」と呼称することとした。
3. 調査は長岡市教育委員会（教育長　横田　博）が主体となり，寺崎裕助（長岡市教育委員会学芸員）が発掘調査を担当した。
4. 遺跡・遺構の写真撮影・測量，遺物の整理・写真撮影及び図版の作成は寺崎が担当した。
5. 本書は寺崎が執筆を行った。
6. 第3図の断面図わきの数字は標高を示す。
7. 出土遺物全体については根津美術館顧問奥田直栄先生，青磁・黄瀬戸・近世陶磁器の分類及び時期推定については東京国立博物館学芸課陶磁室矢部良明先生から御指導をいただいた。
8. 発掘調査から本書の作成まで，川袋町町内会長田辺市作氏，成沢町八島正治氏をはじめ，多くの方々や機関から御指導・御協力をいただいている。ここに深く感謝いたします。

目　次

Ⅰ　発掘調査の経緯 ……………………………… 1
1.　発掘調査に至るまで ……………………………… 1
2.　発掘調査の経過 ……………………………… 1

Ⅱ　川袋の塚 ……………………………… 3
1.　塚周辺の環境 ……………………………… 3
2.　外部形態 ……………………………… 5
3.　土層 ……………………………… 6
4.　内部構造 ……………………………… 6
5.　出土遺物 ……………………………… 9

Ⅲ　まとめ ………………………………11

挿 図 目 次

第1図　塚位置図 ……………………………… 4
第2図　塚全測図 ……………………………… 5
第3図　塚断面図 ……………………………… 7
第4図　基底部遺構 ……………………………… 8
第5図　塚及び塚周辺出土中世陶器 ………………………………10

図 版 目 次

図版第1図　塚付近の航空写真
図版第2図　塚遠景，塚近景，米山塔
図版第3図　供養祭風景，発掘風景，洲珠・伊万里・陶器・銅銭出土状態
図版第4図　基底部遺構，塚南壁セクション，塚完掘状態
図版第5図　塚及び塚周辺出土遺物
図版第6図　塚及び塚周辺出土遺物

Ⅰ 発掘調査の経緯

1. 発掘調査にいたるまで

川袋の塚の発掘調査は新潟県の施行する「信濃川左岸北部地区整備事業」の実施に伴い行われたものである。昭和51年頃からこの塚の所在する長岡市川西地区で県営ほ場整備事業の調査・準備が進められ，昭和51年8月県教育委員会から長岡市教育委員会に対して，この地区の埋蔵文化財包蔵地の所在についての調査依頼があった。調査の結果，川袋町字君帰に塚を確認し，その旨を県教育委員会に報告した。これと併行して，ほ場整備事業にあたる新潟県長岡農地事務所と発掘調査を担当する長岡市教育委員会は地元町内会役員の意見を参考にしてこの塚の取扱いについての協議を重ねた。長岡市教育委員会は県教育委員会からこの塚の遺跡としての位置付けや調査方法の指導を受けながら昭和55年度中には発掘調査を実施し，記録保存を行うとの方針を固めた。これを受けて新潟県農地部が文化財保護法第57条の3の規定による通知を文化庁長官に行った。なお，発掘調査費用については「農業基盤整備事業実施地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の費用負担契約について」（昭和54年10月9日付け農整第611号）にのっとり新潟県と長岡市が負担した。

2. 発掘調査の経過

川袋の塚の発掘調査は昭和55年10月7日から11月4日の延べ12日間にわたって行われた。この間は雨がふり続き，調査は水との闘いであった。次は本塚の発掘調査日誌の抜粋である。

10月7日　発掘調査に先だち，円福寺住職を導師に塚と米山塔の供養祭を地元町内会が行う。米山塔は供養祭終了後，川袋町の天満宮境内に移転する。

8日　本日から発掘に着手する。墳頂部を基点に発掘区（A～D）を設定，ローリングタワーの設置，および湧水を防ぐため調査地区の周囲に排水溝を掘りめぐらす。

9日　午前に排水溝が完成し，塚の本体の発掘にかかる。塚の上部から中・近世陶磁器が出土する。また，排水溝からは中世陶器が2点出土した。

15日　A区にピットらしい遺構が検出され，発掘を行う。ピットの覆土に炭化物及び焼土（?）が混入していた。B区から銅銭（寛永通宝）が出土する。

17日　B区の墳丘部の調査が終り，C区の発掘に移行する。やはり，陶磁器が出土する。

18日　塚の土盛り状態を観察するための土層断面図作成に着手する。本日は東壁断面の北半分についての写真撮影及び実測を終了する。

23日　本日より，D区の調査にも着手する。南壁東半分の土層断面の写真撮影と実測図作成が終了する。

24日　D区の下部に炭化物と焼土（？）が混入したピットが検出された。遺物の出土状況はA・B・C区と同じく中・近世の陶磁器が混在して出土する。東壁断面のうち，残っていた南半分も写真撮影・実測図作成が終了する。

25日　D区の発掘は昨日検出したピットを残して終了する。午後から雨がはげしくなり，足場も悪いため作業を中止する。

28日　午後，雨があがってから，調査地内の排水と，南壁断面の西半分の実測図作成にとりかかる。

29日　最後に残った南壁断面の実測図作成が午前中に終り，土層断面観察用の土手の発掘に着手する。

30日　土手の発掘及び，D区のピットの発掘が終了する。

11月1日　本塚の完掘状況をローリングタワー上より写真撮影し，埋めもどし作業に着手する。

4日　午前中に器材徹収作業も終了し，ここに本塚の現地における発掘調査は完了する。

発掘調査組織表

調査主体	長岡市教育委員会（教育長　横田　博）
調査担当者	寺崎裕助（長岡市教育委員会学芸員）
調査補助員	安藤正美
事務局	長岡市教育委員会　社会教育課（課長　駒形一郎）

Ⅱ 川 袋 の 塚

1. 塚周辺の環境（第1図）

信濃川は小千谷市～長岡市の間で流路を山間部から平野部へと転換させ，氾濫原上に多くの自然堤防[註1]を点在させている。川袋町も信濃川左岸の自然堤防上に営まれている集落であり，長岡市の北西端に位置している。

川袋町における自然堤防の分布は大きくA・B区域に2分される。A区域は字江中瀬・大坪全体及び字十二之木の一部を含む現在の川袋町の集落が所在している箇所であり，B区域は字荒哉・北野・八反割・君帰に該当する範囲である。本塚（第1図1）はB区域に立地し，川袋町の集落の西方約550mに所在する。現在周囲には水田が広がっているが，昭和初期の区画整理前には小規模な畑地が点在していた。

川袋という地名は川が深く溜まって，湖沼のように淀み，あたかも川の袋を成すところに臨んでいる地形から名づけられたとされており，古来から河の袋，河袋，川の袋という村名が古文書のなかに認められる[註2]。川袋町は元和4年（1618年）の牧野藩御知行目録には「一高弐百三拾六石壱斗三升　河袋村」[註3]と記されており，当時の古志郡内では中くらいの石高であったことから，村の基盤はすでに中世末に形成されていたものと考えられる。ちなみに隣接する李崎町の石高は「一高百弐拾六石五斗壱升」[註4]であった。また，元禄年間からは米穀類を中心とした生産品の領外移出を禁じたり，他領から生産品の移入を差し止めたり，犯人の検挙，往来の取り調べを行う津留番所[註5]が置かれていた。

本塚が所在する箇所及び付近一帯は字君帰と呼ばれ，豪族の舟つき場であったという口伝が村人の間に残っており，区画整理の際，塚近くの俗称金塚という畑地より銅銭がかます3袋に入って出土したといわれている。明治45年（1912年）に著された「川西郷土誌」には「…同村の西方田中に二本杉の古木塚の上に今尚繁茂せり地名を君が帰と云う…」[註6]とすでに本塚の存在が明記されている。しかし「古蹟ならんと村民は稱すれば記録の存するものなきは遺憾なり…」[註7]と記述されているように塚の考証は明治時代においても認められなかった。

註1　高野武男「新潟平野の地形的特徴とその形成過程」　URBAN・KUBOTA　1979年

註2　今泉省三「下川西の歴史」　下川西の歴史編集委員会　1969年

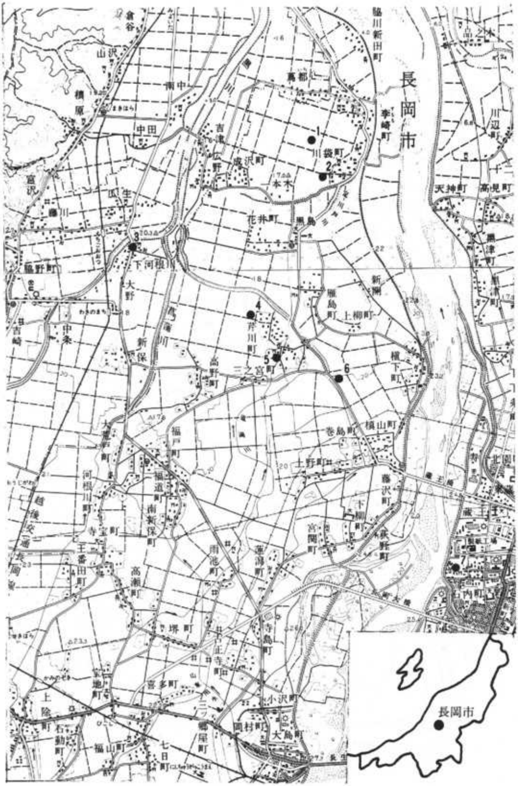
註3　鈴木昭英「御知行目録」　長岡郷土史　1975年

註4　註3と同じ。

註5　註2と同じ。

註6　樋木繁之助「川西郷土誌」　1912年

註7　註6と同じ。



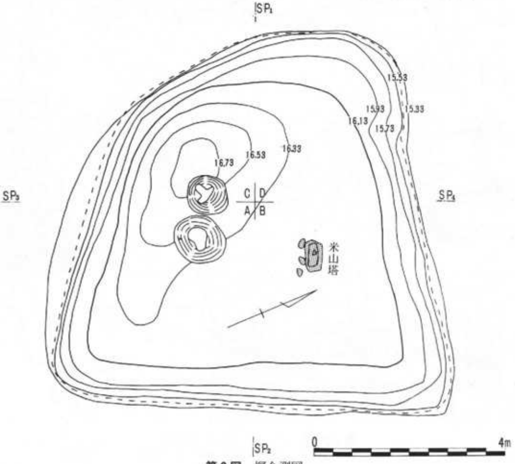
第1図　塚　位　置　図（1：50000）

1．川袋の塚　2．伝楯屋敷（?）　3．下河根川代官館　4．芹川城　5．つぐら屋敷
6．三ツ塚（煙滅）　7．蔵王堂城

2. 外部形態（第2図）

本塚は川袋町の西方約550 m の水田地帯に単基で所在する。発掘調査直前の外部形態として墳丘・米山塔・杉の古木の切り株が認められた。しかし，この地域は1920年代後半（昭和初期）以来区画整理が施行され，周囲の地形も区画整理以前とは様相を異にしている。それゆえ塚自身もかなり変形しているものと考えられる。

墳丘の規模は発掘調査時点で裾部東辺約8.4 m・西辺約5 m・南辺約6 m・北辺約7.7 m，墳頂部東辺約6.5 m・西辺約3 m・南辺約6 m・北辺約6 m，水田面から墳頂部までの高さ約0.8 m[註1]を測る。平面形態は台形状を呈しているが，本来は裾部が約8.5 m四方，墳頂部が約6.5 m四方の方形台状の塚ではなかったかと推定される。米山塔[註2]はB区の墳頂部に所在し，南西の後方はるかに米山を望むことができる。碑形は三角形状を呈し，安山岩製の割石が使用されている。高さ79.5cm，横巾46.5cm，厚さ14cmを測り，正面には米山薬師如来を示す梵字[註3]と「米山薬師如来」という銘文が彫り込まれている。5月と11月に川袋町の町内会により



第2図　塚全測図

祭礼がとり行われている。なお，この石塔は以前には杉の古木付近に建立されていたが，杉が倒れた際同時に倒壊したため現地点に移したものである。A・C区の墳頂部には杉の古木の切り株が2つ認められる。これらは川袋町では「一本杉」，成沢町では「三本杉」と呼称されていた大木であったが，昭和36年（1961年）の第2室戸台風によって倒されたものである。切り株の中心部は空洞となっていたが，年輪は数えられる範囲で200本前後であった。

註1　A・C・D区の墳頂部に認められる約40cmの高まりは杉の古木が倒れた時に隆起したものである。

註2　新潟県立長岡大手高等学校歴史クラブ「古志の石塔」　1973年

註3　大関政子「米山薬師と米山講」山岳宗教史研究叢書9　名著出版　1978年

3. 土　層（第3図）

本塚は第1・2・3層を封土として盛土を行い構築したものと考えられる。第1～3層は暗褐色土を基調とし，混入物で第1層（暗褐色土のみ），第2層(灰色粘土混入)，第3層(炭化物混入）に区分しているが，各封土の特徴は次のようである。

第1層　A～Dの各区で認められ，約30cm～約50cmの厚さで盛土されていた。草の根に侵され土質は悪くボソボソしていた。中・近世陶磁器片，鉄製品が出土している。

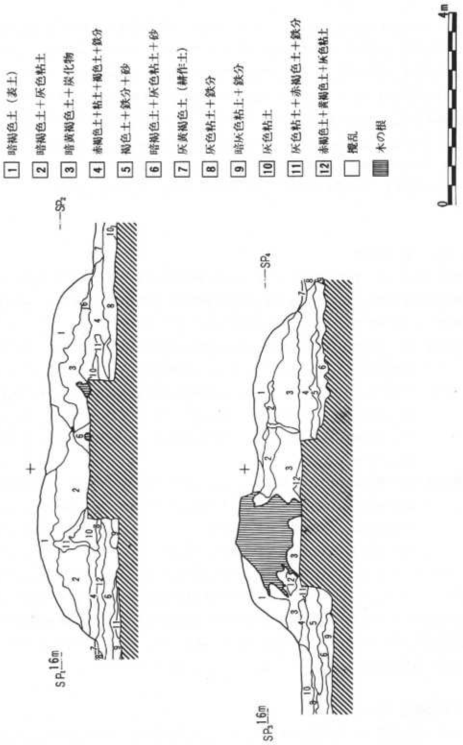
第2層　D区を中心に認められ，約30cm～約70cmの厚さで盛土されていた。灰色粘土がブロック状に混在しているが，下部へゆくにしたがいブロックは大きくなり，第1層よりも粘性は強くなっている。第1層と同じく中・近世陶磁器片，鉄製品が出土している。

第3層　A・B区に認められ，約50cm～約60cmの厚さで盛土されていた。炭化物は全体に認められ，なかでもB区ではかなりの量が検出された。粘性は第1層と同じくらいであるが，土質は第1層よりも良好になっていた。中・近世陶磁器片，鉄製品の他に銅銭（寛永通宝）も1枚B区より出土している。

その他の第4層～第12層は自然堆積層と考えられる。しかし区画整理のためにかなりの変動をきたしていると推測される。また，第6・10・11・12層の一部はブロック状を呈して封土中に混在しているが，これらは杉の根の作用によるものと考えられる。発掘調査の時点では第7層及びC区に認められる第10層は耕作土，第4・5・8・9・11層は水田の床土下部にしばしば見られるような鉄分を多く含んでいる土層であった。

4. 内部構造（第4図）

本塚の内部構造としては第2・3層に掘り込まれた3基のピットとほぼ同一レベルで検出された5個の礫があげられる。なお，周溝の痕跡は確認されずなかったものと判断される。



1 暗褐色土（表土）
2 暗褐色土＋灰色粘土
3 暗黄褐色土＋炭化物
4 赤褐色土＋粘土＋褐色土＋鉄分
5 褐色土＋鉄分＋砂
6 暗褐色土＋灰色粘土＋砂
7 灰黄褐色土（耕作土）
8 灰色粘土＋鉄分
9 暗灰色粘土＋鉄分
10 灰色粘土
11 灰色粘土＋赤褐色土＋鉄分
12 赤褐色土＋黄褐色土＋灰色粘土
攪乱
木の根
SP1 16m
SP2
SP3 16m
SP4
0
4m

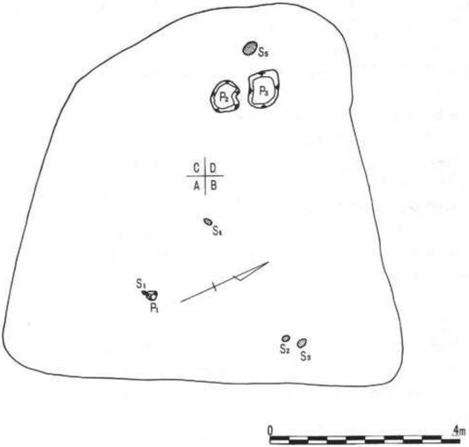
第3図 塚断面図

第1号ピット　A区の第3層中に掘り込まれていた。直径約20cm，深さ約7cmを測った。覆土は黒褐色を呈し，炭化物及び焼土（？）が混入していた。ピット周辺からは中・近世陶磁器片，小礫が出土した。

第2号ピット　D区の第2層中に掘り込まれており,北側には第3号ピットが隣接していた。直径約60cm，深さ約5cmを測り，覆土の状態は第1号ピットと同じであった。

第3号ピット　第2号ピットと同じくD区の第2層中に掘り込まれていた。平面形態は方形状を呈し，長辺約70cm，短辺約60cm，深さ約5cmを測った。覆土の状態は他の2基のピットと同様であった。

5個の礫の大きさは直径約10cm～約30cmで，2個（S_1・S_3）が人工的に手を加えられたと思われる割石，3個（S_2・S_4・S_5）は自然石であった。作業員の話ではこの付近の水田からはS_1・S_3のような割石が多く見つかり，しばしば耕作の妨げになったということである。



第4図　基底部遺構

5. 出土遺物

本塚及び塚周辺からは中世陶器片約60点，青磁片・黄瀬戸片各1点，近世陶磁器片約60点，鉄製品10点，銅銭1点，煙管1点が発見された。

(1) **中世陶器**（第5図，図版第5図）　珠洲，越前が塚の封土中と塚周辺の水田面より出土した。

・**珠洲**（第5図1～18，図版第5図1～16・18・20）　第5図1～11（図版第5図1～11）は大甕の口縁部（第5図1～3，図版第5図1～3）・肩（第5図4～6，図版第5図4～6）・胴部（第5図7～11，図版第5図7～11）破片，第5図12（図版第5図12）は壺の肩の破片と考えられる。第5図13・14（図版第5図13・14）は底部破片，第5図15～18（図版第5図15・16・18・20）は擂鉢の口縁部・底部破片である。擂鉢は卸し目が密で（第5図16・17，図版第5図16・18），口唇部が櫛目波状文で飾られている（第5図15，図版第5図15）など15世紀（室町時代）の擂鉢に認められる特徴[註1]をそなえている。

・**越前**（第5図19～21，図版第5図17・19・22～26）　甕（第5図19・20，図版第5図22～26）及び擂鉢（第5図21，図版第5図17・19）の破片である。擂鉢は卸し目が密であるため15世紀（室町時代）の所産[註2]と推定される。

・**備前又は南加賀**[註3]（第5図22，図版第5図21）　擂鉢の口縁部破片である。卸し目・口縁の特徴から16世紀（桃山時代）ころの所産と推定される。

(2) **青磁**（図版第6図1）　塚東側の水田より出土している。中国製で15世紀に位置づけられる。断面には漆の付着痕が認められる。

(3) **黄瀬戸**（図版第6図2）　第1号ピット付近の封土中より出土している。鉢形を呈し15～16世紀に位置づけられる。

(4) **近世陶磁器**（図版第6図3～20）　全て塚の封土中より出土し，とっくり，盃，小形の茶碗が主体的な器形であった。3は唐津（18世紀），4は古伊万里の鉢（17世紀），5～8は伊万里（18～19世紀），9～11は瀬戸系（19～20世紀），12・13は美濃（20世紀），14～20は産地・時期等が不明なものである。

(5) **泥人形**（図版第6図21）　カエルの形を呈する泥人形である。

(6) **銅銭**（図版第6図22）　寛永通宝でB区の第3層中より出土した。

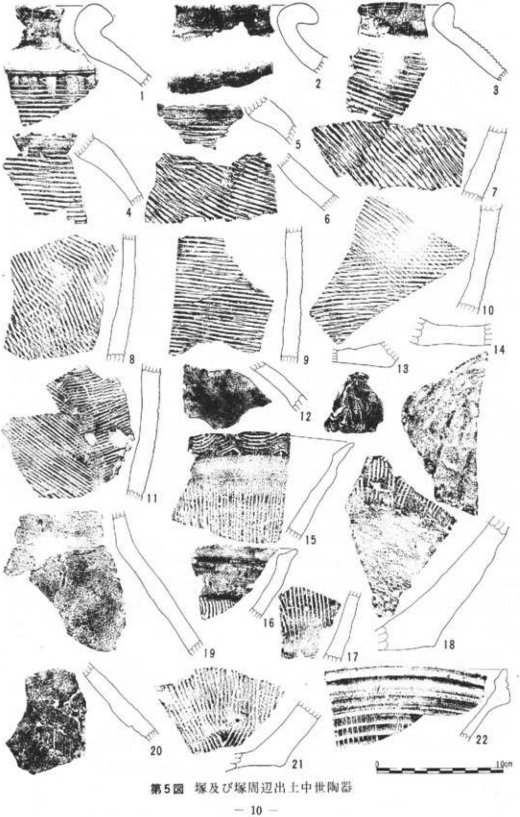
(7) **鉄製品**（図版第6図23・25）　23は蹄鉄，25は横断面四角形の釘である。

(8) **煙管**（図版第6図24）　真鍮（しんちゅう）製の吸口でD区の第3層中より出土した。

註1　吉岡康暢「越前・珠洲」日本陶磁器全集7　中央公論社　1976年

註2　註1と同じ。

註3　学習院大学大学院人文科学研究科伊藤正義氏の御教示による。



第5図　塚及び塚周辺出土中世陶器

Ⅲ ま　と　め

本調査の対象となった川袋の塚の調査結果を集約すると次のようになる。①自然堤防上に立地している。②川袋町は元和4年（1618年）の牧野藩御知行目録に記載されていることから村の基盤はすでに中世末期に形成されていたと考えられる。③塚及び塚の周辺一帯は豪族の舟付き場であったという口伝が残っている。④明治45年（1912年）に著された「川西郷土誌」[註1]には本塚の存在が記載されている。⑤方形台状の形態をなす塚ではなかったかと推定される。⑥杉の古木及び米山塔が塚の墳頂部に認められた。杉の年輪は200本前後を数え，米山塔では現在でも川袋町の町内会によって祭礼が行われている。⑦炭化物と焼土（？）が混入している黒褐色土を覆土にもつ3基の小ピットが塚内部より検出された。⑧塚及び塚周辺より中世（15世紀）～現代（20世紀）にかけての陶磁器，銅銭，煙管等が出土している。

本文ではこれらの調査結果をふまえて本塚の構築年代ならびに性格について簡単にふれてみたい。

まず構築年代であるが，⑧にみられるように塚の封土中からは近世陶磁器（17世紀～20世紀），寛永通宝が出土している。また④より明治45年（1912年）には塚は存在しており，明治年間にも塚を構築したという記録又は言い伝えも認められない。それゆえ本塚は近世（江戸時代）に構築された塚と考えられる。次に性格であるが，今回の調査ではそれを積極的に立証するような資料は発見されなかったため不明としておきたい。しかし，⑦，⑧に認められるように小ピット[註2]が検出され，煙管[註3]，銅銭[註4]が出土したなど墳墓的な性格がかすかにうかがえた。また⑥より米山塔の基壇[註5]とも推測される。現在では⑥にみられるように米山塔の祭礼が行われ，川袋町の米山信仰の場となっている。最後に②，③，⑧の調査結果及び「川袋村に従来よりも楯屋敷という處あり……小土堤及外壕を廻し……按ずるに名稱と云ひ地形と云ひ確かに何人か此處に住せしものなるべし……」[註6]という記録から塚構築以前（中世）に塚及び塚付近の自然堤防上に館もしくは村落らしきものの存在がうかがえることをつけ加えておきたい。

註1　樋木繁之助「川西郷土誌」　1912年

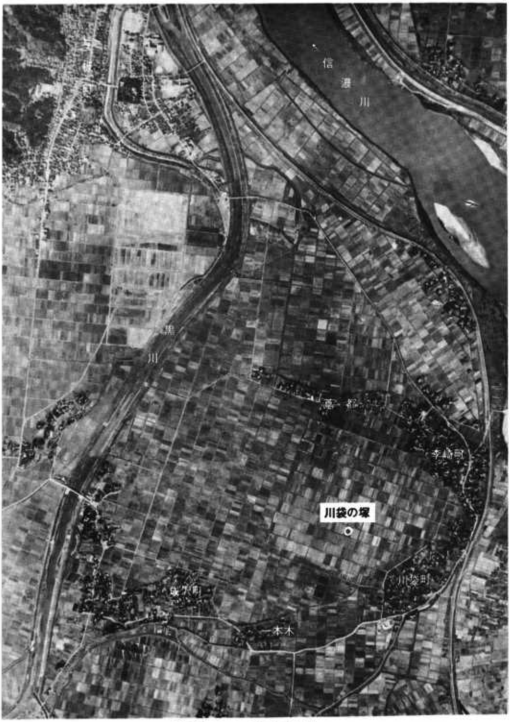
註2　戸根与八郎他「西蒲原郡黒埼町大藪遺跡調査報告」埋蔵文化財発掘調査報告書　新潟県教育委員会　1973年

註3　加藤晋平他「松山廃寺」　八王子市寺田遺跡調査会　1973年

註4　駒形敏朗他「中山5号塚」長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書 長岡市教育委員会 1978年

註5　大関政子「米山薬師と米山講」山岳宗教史研究叢書9　名著出版　1978年

註6　註1と同じ。



塚付近の航空写真

図版第２図

塚 遠 景 （西より）

塚 近 景 （北より）

米山塔（表）

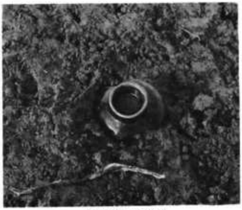
米山塔（裏）

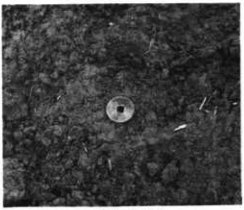
供養祭風景

発掘風景

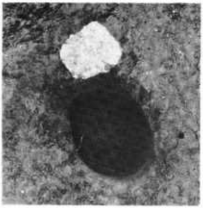
洲珠出土状態

伊万里出土状態


陶器出土状態


銅銭出土状態

図版第４図



基底部遺構（P_1）

基底部遺構（P_2, P_3）

塚南壁セクション

塚 完 掘 状 態

川袋の塚発掘調査報告書

昭和56年3月25日　印刷
昭和56年3月31日　発行

発行　長岡市教育委員会
印刷　あかつき印刷